

台湾の大学生における日本留学と社会的距離

Study Aboard and Social Distance of Taiwanese Undergraduate Students toward Japan

王 珮 瑜*

Pei-Yu Wang

(要旨)

本論は、台湾から日本への留学が増加している中で、日本に対する社会的距離が留学に及ぼす影響を考察するものである。近年、台湾の若者は、マスメディアの発展により、日本の大衆文化だけでなく、日本に関する様々な情報にも接している。このような日本への関心は日本語学習の動機付けとなり、日本に対する興味や関心を高め、さらに、日本留学への期待を呼び起こしたと思われる。しかし、留学は安易にできるものではなく、留学後の異文化への不適応により、留学の成果を十分にあげられないこともある。台湾と日本間の社会的距離が大きければ大きいほど不適応が生じることが仮定される。良い留学のためには確実な準備が必要である。

社会的距離とは、個人が属している集団と他の集団の間の親近ないし疎遠の感情の程度のことである。本稿では、社会的距離の規定要因として、「日本留学に対する準備」、「対人接触」、「日本に関する情報との接触」の3つを想定し、仮説を日本に対する社会的距離が近いほど日本への留学意識が強いと設定し、「台湾における大学生の社会移動意識に関する調査」のデータを用いて、社会的距離の規定要因および留学との関係を明らかにすることを目的としている。

結果は、台湾の大学生の日本に対する社会的距離は、日本留学に対する準備、対人接触、日本に関する情報との接触によって規定されるが、日本に関する情報収集のネットワークとの接触の「質」と「量」によって距離は変わる。そして、留学に対する準備では、留学意欲のある日本語専攻の大学生が最も近く、対人接触では、家族内で日本語学習や日本留学の経験のある者と接触している者の社会的距離は近かった。

マスメディアから入手した日本に関する情報は、間接接触であるため、表面的な情報に過ぎず、表面的な社会的距離しか縮めておらず、直接接触と間接接触により得た情報の間にギャップが存在することも明らかになった。

1. 問題の背景と研究目的

現在台湾では、日本のファッション、化粧品、ゲーム関連製品など日本の若者が好む流行商品の人気が高まっている。1997年頃から、日本のメディアや消費文化を全面的に取り入れる若者たちを指して、「哈日族」(ハージーズ)とよぶようになった。しかし、「哈」に

は無批判に取り入れるという意味があり、「哈日族」は「日本が好きで、日本に関わりさえあれば、何でも受け入れる者たち」というあまりよくない意味にとられる場合もある。一方で、このような日本ブームは、日本語学習の動機付けとなり、また、日本に対する興味や関心を高め、日本留学への関心を呼び起こしたと思われる。

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

これらは、マスメディアが引き起こしたもので、台湾国内には日本の情報があふれている。日本からのファッション雑誌や漫画の輸入、インターネットやケーブルテレビの普及により簡単に入手できる情報、街を歩いている際に出会う日本人など、様々な情報との接触を重ねながら、台湾人の「日本」への関心は高まっている。このような状況の中で、はたして、台湾の人々、特に若者は日本や日本人に対して親近感を持っているのであろうか。そして、社会的距離は縮まっているのであろうか。

社会的距離とは、個人と個人の間、あるいは集団と集団の間の親近ないし疎遠の感情の程度¹⁾のことである。E. ボガーダスは、ある人の属している集団が他の集団との間にどの程度、距離を置こうとしているかという態度を、社会的距離尺度 (social distance scale) とし、それを測定するための指標を作成した²⁾。従来、社会的距離尺度は、ある人種を対象に別の人種集団、民族集団に対する差別や偏見の調査によく使われていたが、社会的距離は、人種問題に限って見られるものではなく、他の社会的条件においても、人々は社会的距離を保っていると考えられる。

石井健一 (2001) は、台湾の若者の間における日本のポピュラー文化の受容は、感覚的で雰囲気優先のものであり、その受容は必ずしも日本のポピュラー文化に対する関心や理解の深まりにつながるものではないと述べている。

一方、日本語専攻の大学生は、概して一般人や他の大学生より、日本文化や日本人に対して受容的であり、興味・関心の度合いが高く、しかも積極的に日本に関わりのある物や人と接触していると考えられる。日本に関する情報と頻繁に接触する機会があればあるほど、日本に対する社会的距離の形成に影響を

与えられていると考えられる。

留学は、個人的な事情という面からだけで説明できるものではない。本人の志願動機から、社会の働きかけまで、個人を取りまわっている人的・社会的ネットワークのすべてが関係している。

本稿では、留学を実現させるものの一つに社会的距離があるとし、それを測定する道具としてボガーダスの社会的距離尺度を用い、社会的距離を規定する要因および社会的距離と留学の関係を明らかにする。

2. 先行研究の考察

2.1. 社会的距離

ボガーダスは、アメリカ人を対象に彼らが他の人種や民族を受容する程度を測定するため、7項目からなる尺度を考案した。それらは、①結婚して近い縁者になる、②自分の属するクラブのメンバーになってよい、③、隣人として受け入れる、④自分と同じ職業に就いてもよい、⑤、アメリカ市民となってよい、⑥アメリカの旅行者としてなら受け入れる、⑦この国から追い出したい、である³⁾。

向井有理子 (2007) は、日本 (大阪)、台湾 (板橋)、韓国 (仁川) において、自尊心⁴⁾と外国人受容の態度について、ボガーダスの7つの尺度を参考にして、「自国における外国人の増加を好ましいと思う態度」、「隣人に迎えることへの抵抗感」、「子供の結婚相手として親族に迎えることへの抵抗感」の3つの尺度を取り出し、日本と台湾において、自尊心の低い人は、文化的不安緩衝機能が不十分なため、定住外国人の増加に対して非好意的であり、外国人が近隣に住むことや自分の子どもが外国人と結婚することに対する抵抗感が強いことを明らかにした。

台湾の伊慶春・章英華 (2006) は、自分の

子供が外国人の女性（中国、東南アジアの華僑、ベトナム、その他の東南アジアの国）と結婚し、台湾に居住することに対して、①賛成、②やや賛成、③どちらとも言えない、④やや反対、⑤反対、のいずれかを選択させる形で、台湾人の外国人花嫁に対する社会的距離について調査した。その結果、社会的距離は個人の政治的立場と外国人との接触に左右されることが検証された。民主進歩党など強い台湾独立意識を持っている者は、外国人花嫁に対して拒否的で社会的距離が遠かった。また、海外旅行経験や外国人と接するなど表面的な対人接触によっても、経済的な地位が高い華僑の花嫁に対する社会的距離が近くなる傾向が見られた。しかし、貧困の著しい中国、ベトナム、その他の東南アジア出身の花嫁に対しては、表面的な対人接触では社会的距離は縮まらなかった。一方、実質的な接触からみると、台湾に嫁いだ外国人の花嫁は、中国とベトナムから多いため、親族の中に中国籍とベトナム籍の花嫁がいる場合は、接触をしているため、社会的距離が短かった。また、台湾独立意識を持っている者も中国籍の花嫁に接する機会の多い者は社会的距離が近かった。

2.2. 社会移動と社会的適応

社会移動と社会的適応に関して、R.マートンは「準拠集団説」を用いて、非所属集団への先取りした同調が社会移動に影響を及ぼすことを説明した⁵⁾。

マートンが言う「準拠集団」とは、一般に、家族、友人集団、近隣集団など身近な所属集団である。人はこれらの集団の規範や価値との関係において、自らの準拠枠を形作り、それに基づいて自己の態度などを上げることになる。一方で、所属していないが、かつて所属した集団、あるいは将来所属したいと

思っている集団も、人々の態度形成に影響を及ぼしている⁶⁾。マートンはこのような非所属集団もまた準拠集団となりうることを明らかにした。

安田三郎（1971）は、マートンの「準拠集団説」について、「非所属の上級集団の規範への同調は、社会移動における予備的適応であり、したがって第1には上昇移動を容易にし、第2には移動後における適応を容易にする。（安田1971:512）」と述べている。そして、上昇移動者が取り込む非所属集団の規範について、「非所属上級集団のあらゆる規範を先取りするということは考えられない。一般的によくみられる例は、外見的な、シンボリックな文化が、下層階級によって模倣されることである……流行というものは、しばしば上層階級から下層階級へ向かって普及していく。しかしながら、外見的・シンボリックの文化が模倣されても必ずしも常にそれが上昇移動の意識の反映とは限らないし、まして上昇移動に役立つとは考えられない。（安田1971:513）」としている。

前述した哈日族はまさにこの例であろう。具体的にいえば、「みんなが日本へ留学に行っている」から、私も留学したいといった場合、その「みんな」は準拠集団である。また、「日本での留学生活に適応できるように準備したい」といった場合、この「準備」は予備的適応である。

本稿では、非所属集団を「準拠集団」とする視点から、留学前の個人の準備や日本に関する情報との接触を社会化の先取りと想定し、その予備的適応が、日本に対する社会的距離にどのように影響するか、また、日本への興味を高め、さらに、日本留学の動機付けになるか、という点を明らかにする。

P. ブラウは社会化の先取りについて、社会移動と社会的態度の関係から述べている。

「移動者たちは、限界人 (marginal men) であって職業的階層組織のなかでの彼らの新しい階層もとの階層のいずれにおいても他の人びとと、ある点ではうまくいかない。彼らが一方のグループの間での友情関係を培かおうが他方のグループとそうしようが、困難な適応が必要となるのである。(Blau 1955=1978: 181)」そして、上層非移動者、下層非移動者、上昇移動者、下降移動者の間における、社会的態度ないし行為に差異があり、それらを、①文化変容のパターン、②社会的不安のパターン、③過剰同調のパターン、の3つに分けている⁷⁾。

「留学」を社会移動とし、ブラウの社会的移動と社会的態度変容のパターンを台湾における大学生の日本留学にあてはめて社会的距離をみると次のようになる。

文化変容のパターンは、留學生活にうまく適応できるパターンである。あらかじめ日本に関する情報を収集し、日本語能力を身につけ、準備ができてから留学するため、留學前の段階において社会的距離がすでに縮まっている。来日後、社会化の先取りが充分になされているため、日本人と社会的接触を持ち、広汎な人間関係を保つことを通じて、次第に日本・日本人に近づいていく。したがって、社会的距離が一段と縮まる。

社会的不安のパターンは、留學生活にうまく適応できないパターンである。日本人との相互作用の疎隔があり、誰にも何事に関しても無関心で、社会的距離は来日前のままである。もしくは、社会的孤立と心理的孤独の増大とともに、社会的距離は大きくなる可能性もある。

過剰同調のパターンは、日本社会に適應するため、日本人に近づこうと努力し、日本人よりも日本人らしい行動をとるパターンであり、社会的距離は意図的に縮まる。

いずれのパターンにおいても、移動後の社会的態度および行動は、移動者がこれから所属したいと望んでいる集団への同調の準備である社会化の先取りが充分になされたかどうかによって規定されている。そのため、日本留学と日本に対する社会的距離の関係をみる際、留学希望者によって行われた日本への同調の準備、すなわち、社会化の先取りが社会的距離にどのような響を及ぼすかについて考える必要がある。上昇志向を持って上層の階層に移動しようと考えている者は、様々な準備をしているはずである。日本留学希望者は、留学を実現させるため、また、新しい環境に適應するため、来日前の段階において、ある程度の日本語能力と日本に関連する知識を持っており、日本人と接触可能な環境に置かれていることが予想できる。

本稿では、社会化の先取りとして、来日前の準備状況、日本に関する経験の積み上げ、日本に関する情報との接触を取り上げて考察する。

2.3. 日本語学習と社会的距離

社会化の先取りの1つである日本語学習と社会的距離の関係について、村野良子 (1995) は「日本人と日本語に対する肯定的な態度⁸⁾」と「統合的な動機要因⁹⁾」と「道具的な動機要因¹⁰⁾」が、日本語の習熟度と高い相関関係にあることを明らかにした。しかし、「日本語学習と日本留学に対する親の態度」と「日本人との結婚と日本への帰化に対する肯定的な態度」と日本語の習熟度との間には、相関関係を認めることはできなかった。すなわち、日本語の習熟度の高い留学生は、外国文化に対する開放的な態度を持ち、日本人と日本語に対して肯定的な態度を持っているが、社会的距離については、日本語能力の高い者は、2つの文化間の隔たりを感じ、逆に距離を遠く

感じていることを示唆した。

しかし、村野の調査では、日本語学習と社会的距離に関しては、11名のデータしかないため、さらに検証する必要がある。

3. 分析枠組と仮説

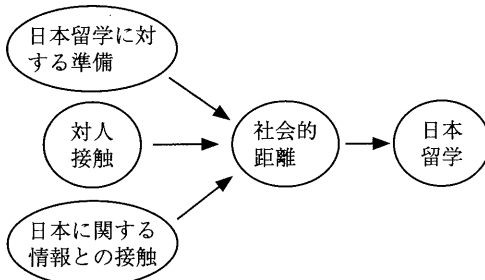


図1 分析枠組

これらの先行研究から、日本留学希望者は、日本社会の一員となるために、留学する前に必要な準備をし、必要な知識を身につける努力、すなわち社会化の先取りを行っているはずである。その社会化の先取りは、日本に対する社会的距離を縮める可能性があり、留学を促進し、留學生生活の適応にも役立つと考えられる。

したがって、本稿では、ボガーダスの「社会的距離」の概念を用いて、日本に関する情報や接触が、日本に対する社会的距離を縮め、日本留学を促進するのではないかとという仮説を検討するとともに、その社会的距離を規定する要因について考察したい。

社会的距離を規定する要因として、①日本留学に対する準備、②対人接触、③日本に関する情報との接触、の3つを想定する。そして、仮説を、①社会的距離は、個人の日本留学に対する準備、対人接触、日本に関する情報との接触によって規定される、②日本に対する社会的距離が近いほど日本への留学意識が強い、と設定する。これを図示したものが図1である。

4. 台湾における大学生の日本に対する社会的距離

4.1. 調査概要

分析に用いたデータは、筆者が2008年2月から3月にかけて実施した「台湾における大学生の社会移動意識」に関するアンケート調査である。調査内容は、①留学意識、②日本に対する社会的距離、③日本に関する情報源との接触、④日本との関わりと日本観、⑤フェースシートである。

調査対象者は、学力レベルの異なる大学4校¹⁾における日本語専攻と日本語以外の専攻の学生である。調査方法は質問紙調査で、自記式、集合調査法で実施した。最終的に656人から有効な回答を得た。調査対象者を大学別・専攻別に示したものが表1である。本論の分析に用いる変数を、表2に示した。

表1 専攻別大学別調査対象者

大学 専攻	合計		N大学 (上位校)		S大学 (中位校)		T大学 (中位校)		H大学 (下位校)	
	実数(人)	比率(%)	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率
全 体	656	100.0	111	16.9	175	26.7	168	25.6	202	30.8
日 本 語	241	36.7	38	34.2	43	24.6	81	48.2	79	39.1
日本語以外	415	63.3	73	65.8	132	75.4	87	51.8	123	60.9

表2 分析に用いる変数

分類	変数名	変数の内容
フェースシート	フェースシート	大学生の専攻
社会的距離の測定尺度	留学前の対日社会的距離	日本に関する社会的距離
	歴史的感情	日本統治時代に対する評価
社会的距離の規定要因	日本留学に対する準備	1. 日本語学習歴 2. 日本語能力 3. 来日経験
	対人接触	1. 日本人との接触 2. 日本関連経験がある台湾人との接触
	日本に関する情報との接触	日本への関心

4.2. 台湾における大学生の日本に対する社会的距離

4.2.1. 日本に対する社会的距離

今日の台湾における大学生の日本に対する社会的距離を測るために、日本人に関する7項目の質問をした。各項目について「賛成」、「やや賛成」、「やや反対」、「反対」のいずれかを選んでもらい、結果を表3に示した。また、「賛成」を選んだ割合を4倍にし、「やや賛成」を選んだ割合を3倍にし、「やや反対」を選んだ割合を2倍にし、「反対」はそのまま合計し、社会的距離スコアにして、同じく表3に示した。平均社会的距離スコアは4点に近いほど、社会的距離が近いとする。「結婚」に対する社会的距離が最も遠く、次いで「市民権」、「職場」、「隣人」、「親友」、「番組」の順で、最後に「観光」が最も近い社会的距離

を示した。

4.2.2. 日本統治時代に対する評価と社会的距離

ボガードスの尺度に加えて、日本統治時代に対する評価も、日本に対する社会的距離を測定する項目として設定した。次の(甲)、(乙)が日本に対する評価である。

(甲) 日本の統治があったから、台湾の農業も経済も医療も発展した。

(乙) 日本政府は台湾人を差別して、台湾人に日本語教育を無理やり押し付けた。

表4のように、大学生656人のうち、541人は日本統治時代に対してプラス評価をしていた。統治時代に対して、(甲)のプラス評価をした者は、(乙)のマイナス評価をした者より、いずれの項目も日本に対する社会的距離が近

表3 社会的距離尺度と社会的距離スコア

(%)

社会的距離尺度	賛成	やや賛成	やや反対	反対	スコア(点)
A. 日本人と結婚すること(結婚)	25.7	51.7	17.8	3.6	3.01
B. 日本人が台湾の市民権を手に入れること(市民権)	42.3	39.9	13.9	2.7	3.24
C. 日本人と同じ職場で働くこと(職場)	53.6	39.3	5.6	0.6	3.48
D. 日本人と同じ街に住み、隣人になること(隣人)	64.5	32.0	2.6	0.2	3.63
E. 日本人の親しい友達を持つこと(親友)	69.8	28.2	1.1	0.2	3.69
F. 日本のテレビドラマが台湾で放映されること(番組)	81.0	17.4	0.6	0.3	3.81
G. 日本人が観光で台湾に来ること(観光)	82.3	16.3	0.3	0.3	3.83

いという傾向がみられた。したがって、日本統治時代に対する評価は社会的距離の測定項目として適切である。また、「プラス評価」を選んだ割合を4倍にし、「ややプラス評価」を選んだ割合を3倍にし、「ややマイナス評価」を選んだ割合を2倍にし、「マイナス評価」はそのまま、合計すると、日本統治時代に対する評価の平均スコアは2.98となる。

4.2.3 日本留学希望者と社会的距離

4.2.3.1. 日本留学希望者の社会的距離

台湾の大学生が留学先を選ぶことが多い10カ国をあげ、「仮に留学するとしたら、どの国を選択しますか」という質問をした。その結果は表5で、日本を希望する者が311人と最

も多く、次いで、アメリカが145人、イギリスが73人の順であった。この3つの国を選んだ大学生の日本に対する社会的距離をみると、「結婚」、「市民権」、「隣人」の3項目のスコアは、日本はアメリカよりやや低いが、それ以外のいずれの項目においてもアメリカより高く、日本への留学希望者は、日本に対してより親近感を持っているようである。一方、イギリス留学の希望者はいずれの項目も平均値を下回っているため、日本に対する社会的距離が遠いということになる

4.2.3.2. 専攻と社会的距離

次に、日本語を専攻している学生と専攻していない学生の社会的距離をみてみよう。

表4 日本統治時代に対する評価別社会的距離スコア

社会的距離スコア 日本統治時代に対する評価 (実数)	結婚	市民権	職場	隣人	親友	番組	観光
(甲) に近い (プラス評価) (95)	3.25	3.24	3.55	3.74	3.80	3.87	3.86
(甲) にやや近い (ややプラス評価) (446)	2.99	3.28	3.48	3.63	3.70	3.80	3.82
(乙) にやや近い (ややマイナス評価) (74)	2.85	3.08	3.38	3.50	3.54	3.77	3.75
(乙) に近い (マイナス評価) (18)	3.11	2.89	3.33	3.56	3.45	3.73	3.78

表5 留学希望国別社会的距離スコア

社会的距離スコア 留学先 (実数)	日本統治	結婚	市民権	職場	隣人	親友	番組	観光
アメリカ (145)	2.97	3.08	3.24	3.51	3.68	3.69	3.83	3.84
イギリス (73)	2.93	2.80	3.22	3.38	3.56	3.61	3.73	3.73
オーストラリア (24)	3.09	2.92	3.21	3.50	3.54	3.54	3.63	3.79
日本 (311)	3.02	3.07	3.20	3.52	3.64	3.77	3.85	3.86
カナダ (28)	2.77	2.85	3.63	3.44	3.63	3.71	3.78	3.82
ニュージーランド (20)	2.85	2.79	3.15	3.30	3.45	3.40	3.55	3.55
中国 (5)	2.50	2.80	3.40	3.00	3.40	3.40	3.60	4.00
フランス (17)	2.94	2.59	3.38	3.31	3.59	3.53	3.94	3.88
ロシア (3)	2.67	3.00	3.33	3.67	4.00	4.00	4.00	4.00
ドイツ (18)	3.06	3.17	3.39	3.50	3.56	3.44	3.72	3.83
その他 (8)	2.57	3.38	3.13	3.38	3.38	3.63	3.75	3.75

前述したように、日本への留学希望者は、「市民権」以外、どの項目においても、社会的距離のスコアが全体の平均値よりも高い。すなわち、日本留学の希望者は日本に対する社会的距離が近い。また、表6によると、「市民権」を除くと、いずれの項目も、留学意欲のある日本語専攻の学生の社会的距離は近い。彼らは、日本と日本人をより受容する傾向があることがうかがえる。一方、留学意欲のない者で、日本語を専攻している者は、「番組」以外、いずれの項目も社会的距離がもっとも遠い。すなわち、日本語を専攻しているため、日本へ留学するというより、日本に対する社会的距離が近い者のほうが、日本への留学意欲が高いといえるであろう。

4.3. 日本に対する社会的距離を規定する要因

それでは、日本に対する社会的距離はどのような要因によって規定されているのであろうか、「日本留学に対する準備」と「対人接触」と「日本に関する情報との接触」の3つ

の面からみることとする。

4.3.1. 日本留学に対する準備

4.3.1.1. 日本語学習歴

表7は、学生の日本語学習歴と社会的距離をみたものである。現在日本語を勉強している者は、「日本統治」と「親友」の2つの項目以外、どの項目においても、社会的距離のスコアが全体の平均値よりも低い傾向が見られる。日本語学習歴の有無別にみると、ない者は、「親友」を除き、すべての項目について日本に対する社会的距離が近い。すなわち、日本語学習歴のない者のほうがある者よりも、日本人をより身近な存在とみている結果になった。

4.3.1.2. 日本語能力

表8は、日本語能力別にみた社会的距離である。レベル1が、日本語能力が最も高い学生群である。レベル1は人数は少ないが、「日本統治」を除き、いずれの項目も社会的距離

表6 留学希望の有無と専攻別社会的距離スコア

留学意欲と専攻 (実数)		社会的距離スコア								
		日本統治	結婚	市民権	職場	隣人	親友	番組	観光	
留学意欲有	全体 (480)	2.99	3.01	3.25	3.52	3.65	3.73	3.82	3.82	
	日本語専攻 (198)	3.03	3.02	3.17	3.52	3.64	3.77	3.85	3.83	
	日本語以外の専攻 (282)	2.95	3.01	3.30	3.53	3.67	3.71	3.80	3.83	
留学意欲無	全体 (175)	2.96	2.99	3.22	3.35	3.54	3.58	3.76	3.81	
	日本語専攻 (43)	2.93	2.84	3.09	3.05	3.28	3.44	3.86	3.74	
	日本語以外の専攻 (132)	2.97	3.04	3.27	3.45	3.62	3.62	3.73	3.83	

表7 日本語学習歴別社会的距離スコア

日本語学習歴 (実数)		社会的距離スコア							
		日本統治	結婚	市民権	職場	隣人	親友	番組	観光
勉強した (101)	2.93	2.99	3.24	3.48	3.59	3.62	3.74	3.79	
勉強している (402)	2.98	2.98	3.19	3.46	3.60	3.71	3.80	3.81	
ない (150)	2.99	3.08	3.36	3.51	3.70	3.68	3.85	3.87	

が遠い。一方、レベル5は、「親友」、「番組」、「観光」以外、5項目で距離が近い。この結果は、村野（1995）の調査と一致している。村野によると、日本語の習得度の高い留学生は、日本文化との距離が隔っていた。

4.3.1.2. 来日経験

表9は、来日経験の有無と社会的距離の関係を示したものである。社会的距離スコアが全体平均を下回っている項目は、来日の経験のある者については、「結婚」、「市民権」、「観光」のみであるが、来日経験のない者は、「日本統治」、「職場」、「隣人」、「番組」、「観光」の5項目であった。すなわち、来日して、「生きている」日本語を聞いたり、直接日本人に接し、「生の」日本に触れた経験がある者は、社会的距離が縮まるようである。

日本語を専攻している大学生は、日本への留学意欲を持っているが、彼らの日本語学習歴と日本語能力は、日本に対する社会的距離を近くするようには機能していない。日本語を学習したり、実際に日本を訪ねたりして、日本についての知識が増えている者は、より

身近な項目、特に「結婚」に対して社会的距離を置き、日本から遠ざかっていくという傾向が見られた。すなわち、自分と他者（台湾人と日本人）の間の類似点と相違点を理解したことがかえって社会的距離を遠くさせているのではなかろうか。

4.3.2. 対人接触

対人接触と社会的距離の関係について、表10は日本人の友人や知人の有無と社会的距離を示したものである。日本人の友人や知人がいる者は、いない者より、社会的距離が近いことが分かる。しかし、友人や知人の人数をみると、社会的距離は人数の多寡には関係がないようである。この調査では、付き合いの親密さについては質問しなかったが、このデータを見る限り、1人でも日本人と接したことがある者は、社会的距離が近い。

表8 日本語能力別社会的距離スコア

社会的距離スコア 日本語能力レベル (実数)	日本統治	結婚	市民権	職場	隣人	親友	番組	観光
レベル1 (6)	3.00	2.50	3.17	3.17	3.00	3.33	3.50	3.67
レベル2 (56)	3.11	2.95	3.11	3.49	3.52	3.70	3.82	3.79
レベル3 (193)	2.96	3.02	3.21	3.47	3.62	3.76	3.87	3.85
レベル4 (145)	2.93	2.96	3.23	3.45	3.65	3.70	3.81	3.81
レベル5 (240 - 日本語学習歴のない者を含む)	2.98	3.05	3.30	3.51	3.65	3.65	3.76	3.82

表9 来日経験の有無別社会的距離スコア

社会的距離スコア 来日経験 (実数)	日本統治	結婚	市民権	職場	隣人	親友	番組	観光
ある (205)	2.98	3.00	3.15	3.48	3.64	3.69	3.83	3.82
ない (447)	2.97	3.01	3.28	3.47	3.61	3.70	3.79	3.82

表11は、家族の中に、日本と関わりを持つ者（日本語を勉強したことがある者や日本への留学経験がある者、日本での仕事経験がある者）がいる者と、いない者との社会的距離の程度をみたものである。日本との関わりを持っている家族がいる場合は、社会的距離が近い。社会的距離は自分の所属する集団から影響を受けていることは明白である。

対人接触によって、日本や日本人に対する理解を深めていくことは、社会的距離を近くする可能性がある。家族に日本と関わりを持つ者がいる場合では、明らかに社会的距離が近い。しかし、表10をみると、日本人の友人や知人が複数いる者は、1人いる者より社会的距離が遠い。表11をみると、日本人との直接接触で得た情報ではない場合、日本や日本人に好意を持った者は、日本人を受容的に受け入れ、社会的距離が近くなると考えられる。

4.3.3. 日本に関する情報との接触

はじめに、社会的距離の規定要因と考えら

れる「日本に関する情報との接触」の実態をみておきたい。

日本の政治、社会、文化について、24項目をあげ、関心を持っているものすべてを選んでもらった結果を、表12に示した。第1位は、回答者656人中528人が選んだ「日本の料理、お菓子」であった。つづいて、2位、「日本のアニメ」（483人）、3位、「日本の世界遺産、観光地、遊園地」（460人）、4位、「日本の漫画」（452人）、5位、「日本の映画」および「日本のトレンドドラマ」（ともに431人）であった。この結果は、まさに台湾の大学生がいかにか日本に対して関心を持っているか、また、日本に関する情報がいかにか台湾であふれているかを示している。

日本に関する情報の収集について、日本人との直接接触が少ない来日前の段階では、「マスメディア」による間接接触は非常に大きな役割を果たしている。特に「テレビ」の影響力を見逃してはならない。石井健一（1996）の「台湾のテレビ視聴者調査¹²⁾」によると、台湾

表10 日本人友人・知人の有無別社会的距離スコア

社会的距離スコア 日本人友人・知人（実数）	日本 統治	結婚	市民権	職場	隣人	親友	番組	観光
無（496）	2.97	3.00	3.23	3.44	3.61	3.66	3.79	3.81
1人（59）	3.07	3.05	3.35	3.57	3.70	3.80	3.88	3.86
複数（97）	2.94	3.05	3.23	3.60	3.68	3.78	3.81	3.85

表11 日本との関わり有無別社会的距離スコア

社会的距離スコア 経験の有無（実数）	日本 統治	結婚	市民権	職場	隣人	親友	番組	観光
父－経験有（47）	2.94	2.92	3.20	3.49	3.65	3.73	3.87	3.85
父－経験無（582）	2.98	3.02	3.24	3.47	3.62	3.69	3.80	3.82
母－経験有（47）	2.96	3.24	3.19	3.57	3.72	3.72	3.92	3.87
母－経験無（609）	2.98	2.99	3.24	3.47	3.61	3.69	3.80	3.82
兄弟－経験有（86）	3.01	3.03	3.26	3.51	3.67	3.72	3.80	3.85
兄弟－経験無（570）	2.97	3.01	3.23	3.47	3.62	3.69	3.81	3.82

の人々に人気のある日本番組の三大ジャンルは、ドラマ（63%）、バラエティー（32%）、それにアニメ（17%）であった。本調査では、1位、「料理・お菓子」、2位、「アニメ」、3位、「世界遺産、観光地、遊園地」であったが、調査時に放送中の「どっちの料理ショー」、「料理の鉄人」などの料理バラエティ、「ニッポン旅×旅ショー」、「Yokoso Japan日本再発見（台湾制作）¹³⁾」などの旅行バラエティーなどが高い人気を保っていたことと呼応している。

日常的にマスメディアが発する各ジャンルへの頻繁な接触は、大学生の日本への興味に拍車をかけているようである。そして、大学生の日本への関心は、「日本に関する情報との接触」の実態を忠実に反映している。

次に、日本への関心と社会的距離との関係をみよう。日本への関心について、社会的距離が近い項目は、「時代劇」、「演歌」、「伝統ス

ポーツ」など日本の伝統的文化と、「学校教育」、「経済、企業経営」などの日本社会の現状を知ることができるものである。一方、「アニメ」、「漫画」、「トレンドドラマ」への関心は、人気が高いわりには、それほど社会的距離を縮めてはいない。

簡単にマスメディアから入手できる情報は、単に頻繁に接触しているからといって、社会的距離を近くするわけではない。レジャー感覚で間接的に日本に接しても、日本はやはり異国である。むしろ、日本の伝統的文化芸術に触れ、理解しようとする者、または、社会の実態を知ろうとしている者、すなわち現実志向を持っている者のほうが、日本に対する社会的距離はより近い。

日本に関する情報との接触は、日本に対する興味や関心を高め、それが結果として、日本語の学習や日本留学の動機付けにつながっているということも考えられる。

表12 日本への関心別社会的距離スコア

日本への関心 (MA) (実数)	社会的距離尺度								
	日本統治	結婚	市民権	職場	隣人	親友	番組	観光	
歴史 (230)	3.01	3.13	3.24	3.56	3.63	3.72	3.83	3.85	
政治、法律、福祉制度 (171)	3.02	3.09	3.27	3.53	3.66	3.69	3.80	3.82	
経済、企業経営 (258)	3.07	3.12	3.30	3.59	3.68	3.75	3.84	3.86	
医学、科学などの技術 (160)	3.03	3.14	3.29	3.56	3.71	3.74	3.79	3.82	
学校教育 (156)	3.03	3.14	3.30	3.59	3.73	3.74	3.88	3.86	
宗教 (80)	3.00	3.10	3.28	3.53	3.67	3.75	3.89	3.89	
伝統スポーツ（相撲など） (151)	3.13	3.19	3.30	3.58	3.69	3.75	3.83	3.83	
伝統文化 (232)	3.04	3.00	3.26	3.54	3.69	3.75	3.84	3.87	
伝統行事 (223)	3.00	3.06	3.25	3.57	3.64	3.74	3.87	3.88	
古典文学 (138)	3.07	3.08	3.21	3.55	3.66	3.75	3.88	3.86	
近代小説 (119)	3.05	3.10	3.21	3.55	3.61	3.73	3.87	3.84	
現代小説 (217)	3.01	3.06	3.21	3.49	3.63	3.73	3.86	3.85	
演歌 (40)	3.00	3.18	3.35	3.68	3.78	3.85	3.90	3.93	
時代劇 (136)	3.02	3.15	3.33	3.64	3.74	3.79	3.91	3.90	
トレンドドラマ (431)	2.99	3.01	3.23	3.48	3.65	3.74	3.86	3.86	

流行の歌	(392)	2.98	3.08	3.23	3.51	3.66	3.76	3.86	3.86
ファッション	(389)	3.02	2.98	3.23	3.49	3.65	3.73	3.83	3.82
ゲーム	(333)	2.98	3.12	3.23	3.49	3.65	3.71	3.85	3.85
料理・お菓子	(528)	3.01	3.02	3.24	3.48	3.63	3.71	3.83	3.84
アイドル・俳優	(329)	2.98	3.10	3.24	3.50	3.66	3.77	3.88	3.85
映画	(431)	3.01	3.05	3.25	3.52	3.65	3.74	3.85	3.85
アニメ	(483)	2.97	3.03	3.25	3.48	3.63	3.70	3.83	3.83
漫画	(452)	2.97	3.04	3.24	3.47	3.62	3.70	3.84	3.85
世界遺産、観光地、遊園地	(460)	3.00	3.05	3.25	3.51	3.66	3.74	3.85	3.86
その他	(19)	3.33	3.26	3.06	3.37	3.63	3.68	3.68	3.68

5. 社会的距離と日本留学

以上見てきたことから、社会的距離とその規定要因の関係について、次のことが明らかになった。

まず、個人の留学に対する準備により、社会的距離が縮まったとは断言できないが、留学意欲のある日本語を専攻している大学生は最も近い社会的距離を示している。すなわち、日本留学の希望者は日本に対する社会的距離が近い。

次に、対人接触については、日本人との接触経験の有無は確かに社会的距離の程度に影響を与えている。来日経験のある者は社会的距離が近いことに加えて、日本人の友人や知人がいる場合にも、社会的距離は近い。しかし、日本人の友人や知人の人数との関係は検証できなかった。一方、家族に日本留学や日本語学習をしている者がいる、あるいはいた場合、社会的距離は近い。

日本に関する情報との接触については、日本の何かに興味を持ち、それに触れた大学生の日本に対する社会的距離は近い。

しかし、若者の人気を集めているファッション、ゲーム、流行歌、アイドルに関するマスメディアから流れてくる情報に毎日のように接触していると、気が付いた時には、「日

本」はごく身近に感じられる。そのため、日本に対する社会的距離には影響を与えなくなるのであろう。

マスメディアから入手した日本に関する情報は、間接接触であるため、表面的な情報に過ぎず、表面的な社会的距離しか縮めない。前述したように、メディアから入手した間接的な接触による情報と、日本人との直接接触、日本への訪問経験により直接得た情報との間にギャップが存在することも明らかになった。

日本語を学習し、対人接触や日本に関する情報との接触を重ねて日本に対する理解を深めていくと、社会的距離の程度が変わっていくと考えられる。日本に対する理解が好意的であれば、好意的な行動をとり、日本に対する社会的距離が近くなるのは当然であろう。しかし、反対に遠くなる可能性もある。それは、お互いの相違を知れば、意見の衝突などを避けるために、意識的に距離をおくような場合もあると考えられるからである。これも良い人間関係を保つために好意的な行動をとったといえるであろう。

日本に関する情報との接触は社会的距離の程度に影響を及ぼす。社会的距離が近ければ、更に日本に興味をもたせるであろう。

すなわち、日本に対する社会的距離は個人の日本留学に対する準備、対人接触、日本に関

する情報との接触によって規定される。そして、日本に関する情報を収集するネットワークとの接触の「質」と「量」によって社会的距離の程度は変わる。

留学目的によって留学意識は多様化し、①社会貢献型、②強制型、③遊び型、④挑戦型、⑤立身出世型、⑥体験型、⑦投機型の7つに分類することができた¹⁴⁾。本論で分析した社会的距離を規定する日本への関心の「日本の料理、お菓子」、「日本のアニメ」、「日本の世界遺産、観光地、遊園地」、「日本の漫画」、「日

本の映画」、「日本のトレンドドラマ」などのような関心は、異なる文化や世界を体験したいという留学目的につながり、体験型の留学と遊び型の留学に導くであろう。また、「経済、企業経営」、「学校教育」という現実に役立つ知識への関心は社会貢献型の留学と立身出世型の留学につながると考えられる。

本論で日本留学と社会的距離の関係を分析した結果、留学意識と実際の留学との関係、さらに、社会的距離の留学の成果への影響についての考察が課題となる。

【注】

- 1) 鈴木康平「社会的距離」、岡本英雄「社会的距離尺度」、森岡清美、塩原勉、本間康平編集代表『新社会学辞典』有斐閣、1993、635-636。
- 2) 同注1
- 3) Emory S. Bogardus, "A Social Distance Scale," *Sociology and Social Research*, 17: 265-271.
- 4) 向井有理子(2007)は、存在脅威管理理論の観点から考え、自尊心の低い人は、自尊心の高い人に比べ、文化的不安緩衝機能が不十分な状態であるとし、外国人への好意的・受容的な態度が弱いことを明らかにした。自尊心尺度について、向井はRosenberg(1965)の自尊心尺度の山本・松井・斉藤(1982)による邦訳版の中から選択した5項目に、Coopersmith(1967)の自尊心尺度を参考に独自に作成した社会的側面に関わる5項目を加え、計10項目を使用した。例えば、「私はいろいろな良い素質を持っている」、「何かにつけて自分は役に立たない人間だと思う(反転項目)」などがあり、1「そう思う」から4「そう思わない」の4件法でアンケート調査をした。(向井2007: 23)
- 5) 安田三郎, 1971, 「社会移動と社会的態度」『社会移動の研究』東京大学出版会, 510-526.
- 6) 船津衛「準拠集団」、森岡清美、塩原勉、本間康平編集代表『新社会学辞典』有斐閣、1993、722。
- 7) Peter. M. Blau, 1955, "Social Mobility and Interpersonal Relations," *American Sociological Review*, 3 (21): 290-295, 仲村祥一訳「社会的移動と人間関係」『都市化の社会学〔増補〕』誠信書房、1978、180-190。

- 8) 日本人に対する肯定的な態度とは、「日本人は親切でやさしい」や「日本人と親しくなるにつれて言葉が上手になりたいという気持ちが強くなった」などのことである。
- 9) 統合的動機とは、日本の社会や文化や文学について理解を深めるために、または、できるだけ多くの日本人と知り合い、さまざまな活動に積極的に参加するために日本語を学習したいと思う態度である。
- 10) 道具的な動機とは、将来の仕事のためや大学の入学試験のために日本語を学習したいという態度である。
- 11) 台湾では、大專入学考試中心(入学試験センター)により、毎年2月22、23日に「學科能力測驗(進学希望者が大学進学に必要な学力を持っているかどうかを測る試験)」、7月1、2、3日に「指定科目考試(各大学により試験科目は異なる)」が全国統一試験として行われる。その成績と個人の希望により、進学大学が決まる。本稿における学校選択の参考となる基準は、2007年に台湾の「大專考試分發入学委員會」により発表された各大学の最低合格点数である。
- 12) 当調査は、NHK放送文化基金の助成で、電話調査法により、1996年8月に台湾の新聞社・聯合報の協力を得て台湾全土で実施されたものである。電話番号をランダムに抽出し、さらにこの電話番号の最後の2桁をランダムに変更した新しい番号に電話をかけるという手順で実施された。電話の総発信回数は3,759回、最終的な有効回答数は1,145回であった。
- 13) ビジット・ビジット・ジャパン・キャンペーン事業として、台湾のテレビ番組で日本紹介の旅行情報番組「Yokoso! Japan日本再発見」が2004

年から42回にわたり放映されていた。

- 14) 王珮瑜, 2008, 「台湾における大学生の上昇志向と留学意識」(投稿中)において、留学意識を規定する出身階層と学力、および上昇志向の3つの要因を組み合わせ、留学を①社会貢献型、②強制型、③遊び型、④挑戦型、⑤立身出世型、⑥体験型、⑦投機型の7つに類型化した。

【引用・参考文献】

Emory. S. Bogardus, 1925, "Social Distance and Its Origins," *Journal of Applied Sociology*, 9 : 216-226.

—————, 1933, "A Social Distance Scale," *Sociology and Social Research*, 17 : 265-271.

(http://www.brocku.ca/Mead Project/Bogardus/Bogardus_1933.html, January, 18, 2008).

福武直・松原直郎編, 1971, 「データ蒐集の技法」『社会調査法』有斐閣, 72-73.

福武直・安田三郎訳, 1964, 「態度および意見の測定」『ランドバーク社会調査』東京大学出版会, 239-287.

石井健一編集代表, 2001, 『東アジアの日本大衆文

化』蒼蒼社.

伊慶春・章英華, 2006, 「對娶外籍與大陸媳婦的態度：社會接觸的重要性」『台灣社會學』12 : 191-232.

村野良子, 1995, 「日本語習熟度と情意要因」『ICU日本語教育研究センター紀要』4 : 21-42.

向井有理子, 2007, 「自尊心と外国人受容-日本・韓国・台湾の調査から-」『都市文化研究 Studies in Urban Cultures』9 : 20-33.

Peter. M. Blau, 1955, "Social Mobility and Interpersonal Relations," *American Sociological Review*, 3 (21) : 290-295, 仲村祥一訳「社会的移動と人間関係」鈴木広編『都市化の社会学(増補)』誠信書房, 1978, 180-190.

李洋陽, 1995, 「中国人留学生の日本人イメージ形成とその形成過程-マスメディアと直接接触の影響を中心に-」『東京大学大学院情報学環紀要情報学研究』68 : 212-243.

安田三郎, 1971, 「社会移動と社会的態度」『社会移動の研究』東京大学出版会, 465-526.